

経済・金融フラッシュ

No.07-029 2007/06/15

07年1Q 資金循環統計～法人の資金超過がいつそう縮小

ニッセイ基礎研究所 経済調査部門 シニアエコノミスト 矢嶋 康次

TEL:03-3512-1837 E-mail:yyajima@nli-research.co.jp

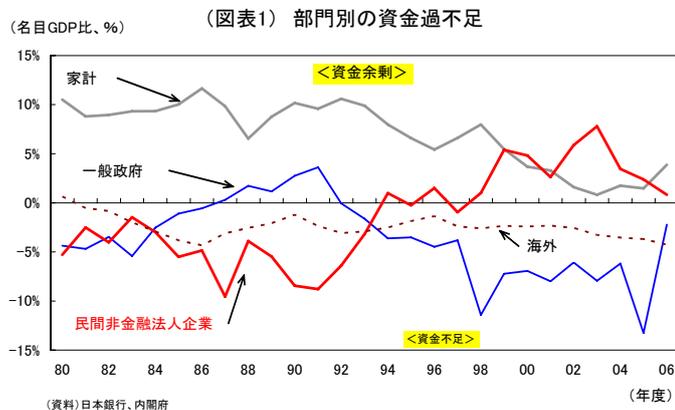
1. 部門別資金過不足（06年度）：法人の資金超過がいつそう縮小

日本銀行が6月15日に公表した資金循環統計によると、民間非金融法人の資金余剰幅がいつそう縮小してきている（図表1）。

民間非金融法人企業は、98年度より連続して資金余剰主体となった。2000年度には家計部門の資金余剰幅を上回るようになり、03年度には名目GDP比7.8%まで余剰を拡大した。潤沢なキャッシュフロー

を背景に余剰は継続しているが、景気拡大に伴う設備投資の広がりを受けて、03年度以降、その幅は縮小してきた（05年度2.4%、06年度0.8%）。

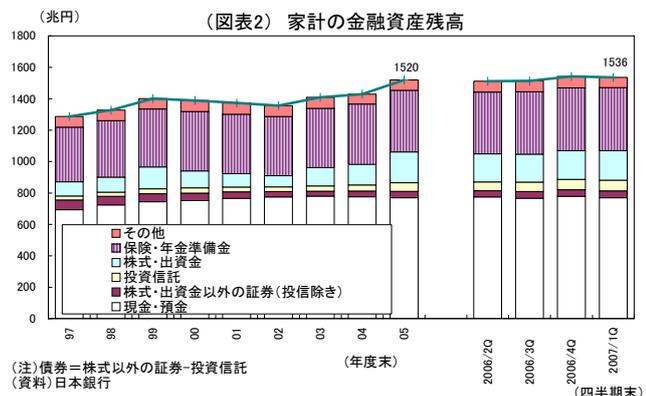
一方、家計部門の余剰幅縮小の動きは03年度（0.8%）を底に変化してきている。06年度は3.9%と05年度1.5%から2.4ポイント上昇し、2000年度程度のレベルに戻っている。



2. 個人金融資産残高（06年度末）：残高過去最高

06年度末の個人金融資産残高は、05年度末から16兆円増の1536兆円と年度末の過去最高を更新した（図表2）。

残高では、現金・預金が770兆円で個人金融資産全体に占める割合が約50%と依然諸外国と比べてウェー



トが高いが、(図3)のように貯蓄と投資に分けてみると、確実に投資への動きが続いていることが確認できる。

増加の内訳を見ると(時価の増減を除き、4四半期累計での金額)、増加が大きいのは保険・年金準備金(11.1兆円)、投資信託(10.8兆円)となっている。(図表4)。

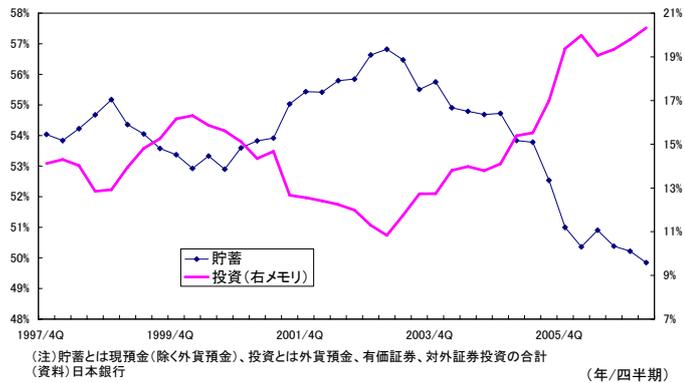
一方減少しているのは、現金・預金(マイナス0.4兆円)、株式・出資金(マイナス3.8兆円)となっている。

現金・預金の動きでは、流動性預金が5.8兆円の増加を示す一方で、定期性預金が6.5兆円減少している(図表5)。

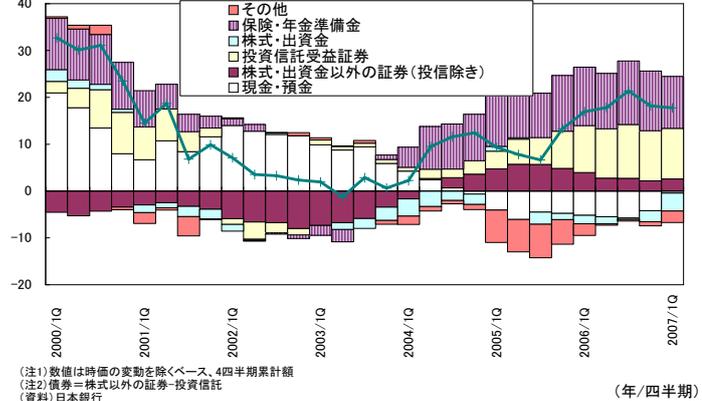
また2005年頃から外貨預金も資金流出となってきている。ただし投信の拡大が急ピッチで起きていることをあわせて考えると、外貨預金のかなりの部分が投信へシフトしている可能性が高いだろう。

証券(投信信託を除く株式・出資金以外の証券)の動きでは、引き続き金融債、信託受益権、事業債からの資金流入が続く。一方国債への流入はプラスが続いているが、足元一服感がでている(図表6)。

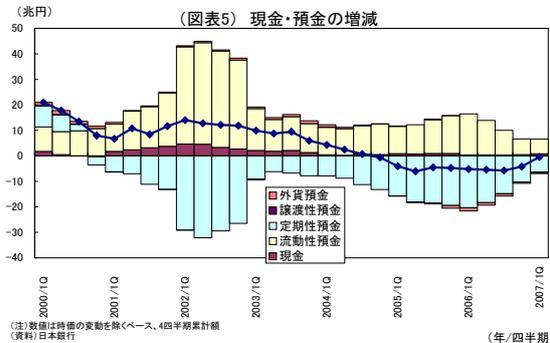
(図表3) 貯蓄、投資が個人金融資産全体に占める割合



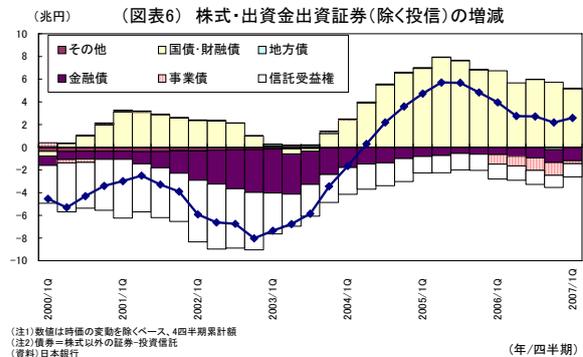
(図表4) 家計の金融資産残増減



(図表5) 現金・預金の増減



(図表6) 株式・出資金出資証券(除く投信)の増減



(お願い)本誌記載のデータは各種の情報源から入手・加工したものであり、その正確性と安全性を保証するものではありません。また、本誌は情報提供が目的であり、記載の意見や予測は、いかなる契約の締結や解約を勧誘するものでもありません。